今月の
ブックトーク

6月（水無月）「時の記念日」

前田 由紀
／渋谷教育学園渋谷中学高等学校司書教諭

6月10日は、時の記念日です。671年のこの日に初めて漏刻（水時計）が時を告げたという日本書紀の記述に由来しています。この記念日は、1920年に時の展覧会が東京の国立博物館で開催され、大人気となり、時間厳守の機運が高まり誕生したようです。ということで、今回は、時間にまつわるお話です。

ミヒャエル・エンデ・作
大島 かおり・訳
岩波書店

まずは、時間泥棒の灰色の男たちと対決する少女のお話『**モモ**』です。モモは、古びた野外円形劇場に一人で住んでいる女の子です。彼女は、周りの悩める人たちの話をじっくりよく聞き、不思議にも前向きで明るい気持ちに変えてくれます。この小説には「世のなかの不幸というものはすべて、みんながやたらとうそをつくことから生まれている、それもわざとついたうそばかりではない、せっかちすぎたり、正しくものを見きわめずにうっかり口にしたりするうそのせいなのだ。」などドキッとする言葉がちりばめられています。モモが縦横無尽に時間の壁を越え、平穏な日常を取り戻す活躍を見届けてください。

次は、『**時をかける少女**』。中3の芳山和子は理科室で二人の同級生と掃除をしているときにラベンダーのような香りで意識を失ってから時間移動ができる超能力をもつことになります。

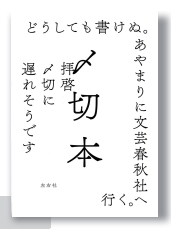
筒井 康隆 ・著
KADOKAWA

こんな超能力をもったら、実際どうなるか追体験ができます。この経験を通して、主人公は、淡い恋をするのですが、その切なさがこの小説で心に残る名シーンとなっています。映画でもおなじみですが、原作は、また違った魅力を秘めています。

では、現在、時間に追われている人が多いと思いますが、3冊目は、『**映画を早送りで観る人たち：ファスト映画・ネタバレ-コンテンツ消費の現在形**』です。2010年代後半以降、動画配信サービスで倍速視聴や10秒飛ばし機能が実装されると、それ以前の映画「鑑賞」がコンテンツ「消費」時代に突入したと筆者は、分析しています。その傾向は若者に多いので、「今の若者は」というよくある年配層の批判の対象となってしまいがちですが、倍速にする背景には、それを必要とする状況があることも客観的に指摘しており、メディア社会の変遷がよく理解できます。

稲田 豊史 ・著
光文社

最後に、迫る締切に右往左往する作家の皆さんのお話『**〆切本**』です。文筆業に締切はつきものですが、よくご存じの作家さんたちの苦悩を知ると、より親近感がわいてきます。一人の作家で10ページ足らずなので、毎日一人ずつじっくり読み進めても楽しいです。「仕事にかかるのは気迫だが、仕事をし終えるには諦めが必要である」（外山滋比古）とか、「〈終わり〉が間近に迫っているという危機感が、知に、勇気ある飛躍を促し、ときに驚異的な洞察をもたらすのである」（大澤真幸）とか皆個性的ですが、小川洋子さんの「イーヨーのつぼの中」は、詩的で美しいお話で、創作の根源が垣間見えます（イーヨーは『クマのプーさん』に出てくるロバのぬいぐるみ）。



左右社編集部・編
左右社

※「今月のブックトーク」「図書館のこよみ」は、全国学校図書館協議会Webサイトに掲載しています。QRコードより、PDFもご活用ください。